



『領解文』を学ぶ

20230906-07 本願寺三河別院 山上正尊

御正忌報恩講の改悔批判。与尊者・浅田和上の呼びかけに応じて、「願解文」を唱和する参集者(=2017年1月)



宗祖・親鸞聖人のご命日の法要である御正忌報恩講が、来年1月9日から16日まで本山・御影堂で営まれる。期間中の夕刻、初夜のおつとめで行われるのが、第8代蓮如上人の頃から続く「改悔批判」。その心を勧学の浅田恵真和上に執筆していただいた。

御正忌報恩講と改悔批判

権限の「与奪」

平成21(2009)年の御正忌報恩講において、門主の「改悔批判を与奪する」という発言があった。門主として、御正忌報恩講の期間に、門主の権限の一部を与えられたいという。御正忌報恩講が終わる瞬間から「与奪」という言葉が手渡される。「改悔批判」という言葉は、御正忌報恩講の座に立つ参集者の心の中にある。御正忌報恩講の座に立つ参集者の心の中にある。御正忌報恩講の座に立つ参集者の心の中にある。

安心の判定

これは御正忌報恩講の座に立つ参集者の心の中にある。御正忌報恩講の座に立つ参集者の心の中にある。御正忌報恩講の座に立つ参集者の心の中にある。

自督安心を御影前で

ただが必要があります。改悔批判の後半は、この内容の意味を安心・報謝・師徳の法度の4項目に分けて懇切丁寧に解説してください。これが現代版願解文とも呼べる解説です。ご門主のお言葉としてしっかりと聞いていただきたいと思えます。

他力の「ご安心をいただく」とはよく聞く言葉ですが、それを実際にご門主に判断していただく儀式が改悔批判です。ぜひ、来春には皆さんそろって御正忌報恩講の改悔批判の座に列席し、ご安心の判定を受けてください。

本願寺新報 2022. 12. 20 御正忌報恩講と改悔批判 浅田恵真和上

■信心獲得せしむべきものなり

- 5 帖目 1 1 通 御正忌章
 2-1 『註釈版』1107頁) 3-1 1 『註釈版』1156頁) 4-5 『註釈版』1170頁)
 4-6 『註釈版』1171頁) 4-7 『註釈版』1174頁) 六ヶ條 4-8 『註釈版』1176頁)
 4-1 5 『註釈版』1188頁)
 信心獲得 すなわち 聞其名号
 たのむ機 「南无といふは歸命」

もろもろの雑行をすてゝ、うたがひなく一心一向に阿彌陀佛をたのみたてまつるこゝろなり。

たすくる法「またこれ發願廻向の義なり。阿彌陀佛といふはすなはちその行」

一心に彌陀を歸命する衆生を、やうもなくたすけたまへるいはれ

『御文章』の六字釈は、機法門を据わりとして願行門の義を撰めるという釈意であります。(騰瑞夢先生会読録)

もろもろの雑行

『領解文』

もろもろの雑行雑修自力のこゝろをふりすてゝ、

一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生御たすけさふらへとたのみまうしてさふらふたのむ一念のとき、往生一定御たすけ治定とぞんじ

改悔批判(梯和上)

雑行雑修とは、ここでは自分の修行能力をたのみにして、本願他力をたのむところが欠けているものを総称されたことばであります。

雑行

「化身土文類」觀經隱顯(『註釈版』386頁) 就行立信

正行 往生經の行 読誦・觀察・礼・称・讚嘆供養

雑行 正助二行を除きて以外の自余の諸善は、ことごとく雑行と名づく

『高僧和讃』善導讚68首

「浄土の行にあらぬをば ひとへに雑行となづけたり」

邪雑 邪曲

雑多 行の種類や目的が雑多

雑修

『高僧和讃』善導讚66首

助正ならべて修するをば すなはち雑修となづけたり

『高僧和讃』善導讚67首

仏号むねと修すれども 現世をいのる行者をば これも雑修となづけけてぞ

『一念多念証文』(『註釈版』688頁)

異学といふは、聖道・外道におもむきて、余行を修し、余仏を念ず、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむものなり、これは外道なり、これらはひとへに自力をたのむものなり。

別解は、念仏をしながら他力をたのまぬなり。別といふは、ひとつなることを、ふたつにわかちなすことばなり、解はさるといふ、とくといふことばなり、念仏をしながら自力にさとりなすなり。かるがゆゑに別解といふなり。また助業をこのむもの、これすなはち自力をあげむひとなり。自力といふは、わが身をたのみ、わがころをたのむ、わが力をあげみ、わがさまざまの善根をたのむひとなり。

『教章』 生活

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歓喜のうちに、現世祈禱などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。

すてい

「行文類」引文『選択集』（『註釈版』186頁）

速欲離生死、二種勝法中、且闍聖道門選入淨土門。欲入淨土門、正雜二行中、且拋諸雜行。選應歸正行。欲修於正行、正助二業中、猶傍於助業選應專正定。正定之業者即是稱佛名。稱名必得生。依佛本願故。

「信文類」大信釈 引文散善義 深心釈（『註釈版』218頁）

また深信するもの、仰ぎ願はくは一切の行者等、一心にただ仏語を信じて身命を顧みず、決定して行によりて、仏の捨てしめたまふをばすなはち捨て、仏の行ぜしめたまふをばすなはち行ぜず。仏の去らしめたまふところをばすなはち去つ。これを仏教に随順し、仏意に随順すと名づく。これを仏願に随順すと名づく。これを真の仏弟子と名づく。

Q 何を捨てたのか？

A 観仏など非本願の行による成仏道。

Q 仏が観仏による成仏道を捨てさせたという根拠は？

A 『観経』流通分に釋尊自らの言葉として観仏を捨てしめ、称名念仏を行せしめている。

此經名觀極樂國土・無量壽佛・觀世音菩薩・大勢至菩薩、亦名淨除業障生諸佛前。……上來定散兩門の益を説くといへども、

佛告阿難、汝、好持是語。持是語者、即是持無量壽佛名。佛説

此語時、尊者目犍連・阿難及韋提希等聞佛所説、皆大歡喜。して一向にもつぱら弥陀仏の名を稱せしむるにあり。

Q 観仏による成仏道とはどのようなものか？

A 唯識法身の觀、自性清淨仏性觀（『聖典全書』一卷45頁）（『註釈版』七祖篇432頁）

<p>淨影寺慧遠『觀經義疏』 (T二七卷180頁)</p>	<p>聖典セミナー『觀經』 梯實圓和上182頁</p>
<p>是心作仏 始学名作 己の当果に望んで 彼に生ずるを觀ずる 由つて心作仏と名く。</p>	<p>どんなに濁っていても水の本体は清淨なわけですから、淨化さえすれば本来の症状を回復するように、懺悔し、滅罪して、観仏の修行をおこなえば、心の濁りが淨化され、心は本来の清淨な法身にかえる</p>
<p>是心是仏 終成即是 諸仏法身と己とは同体を現す。 仏を觀ずる時、心中に現ずるは 即是諸仏法身の体</p>	<p>法身とは、仏の無分別智によって悟られている不生不滅の法（真如・法性）のことで、衆生の煩惱の心も、その本性は清淨な法身真如そのものである</p>

聖典セミナー『観経』梯實圓和上182頁

いずれにしても、法界身とは諸仏の本性であると同時に、一切の衆生の心の本性でもある「真如・法性」そのものことで、それを仏のがわでいえば、法身といい、衆生のうえでいえば、心の本性である本来清浄な仏性（如来蔵）のことである、と解釈されたわけです。

一心に阿彌陀如來

「ふたごころがない」ということで、疑い心をまじえない心相

御たすけさぶらへとたのみまうしてさぶらふ

たのむ（頼む）『大辞林』

- ①相手に：してくれ、または：しないでくれと願ってそれを相手に伝える。依頼する。
 - ②どう活動・処理すべきなのか知っている人に処理などを依頼する。
 - ③依存しうるだけの能力がそれにあると信じる。あてにする。
- 憑む『漢字源』

- ①よる。よりかかる。たよりにする。
- ②よる。たのむ。相手をあてにする。その力をたのみにする。

「信文類」(『註釈版』295頁)

ここをもつて、いま大聖（釈尊）の真説によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治す、これを憐憫して療したまふ。たとへば醍醐の妙薬の、一切の病を療するがごとし。

「行文類」六字釈(『註釈版』170頁)

「帰説(キエツ)」「ヨリタノムナリ、「帰説(キサイ)」「ヨリカカルナリ
『唯信鈔文意』(『註釈版』699頁)

本願他力をたのみて、自力をはなれたる、これを唯信といふ

信憑(たのむ)

自力を捨て他力に帰する本願の信心を表すことば

たすけたまへとたのむ

鎮西派 願求 「たすけてください阿彌陀さま」

蓮如上人 許諾 「かならずたすける」と仰せられる決定摂取の勅命を受諾して
「さようならば、おたすけくださいませ」「左様になし給へ」

自力の行も自力の信もすてる …… 私がさとする仏道をすてる 仏がすくう仏道に乗る

どんな人が報恩講に集まっていたか

(5-1) 不信心のともがら (4-6) くせ法門を沙汰して法義をみだす

(3-1) 近代このごろの人の佛法しりがほの體たらくをみをよぶに、外相には佛法を信するよしをひとにみえて、内心にはさらにもて當流安心の一途を決定せしめたる分なくして、あまさへ相傳もせざる聖教をわが身の字ちからをもてこれをよみて、しらぬ多せ法門をいひて、自他の門徒中を經廻して虚言をかまへ、結句本寺よりの成敗と號して人をたぶろかし物をとりに當流の一義をけがす條、眞實眞實あさましき次第にあらざや。

(4-5) 宿善の有無といふことをしらずして勸化をなすなり

(4-6) 人まねばかりに御影前へ出仕をいたすやから

(4-7) すすすの門下のたぐひは、他力の信心のとほり聴聞のともがらこれおほきところに、坊主

よりこれを腹立せしむるよしきこえはんべり。言語道断の次第なり。
(4)坊主分の人、ちかごろはこのほか重坏のよし、そのきこえあり
(5)他宗・他人に對してそのふるまひをみせずして、又信心のやうをもかたるべからず。一切の諸神などをもわが信ぜぬまでなり、をろかにすべからず。

新しい領解文にまつわる4つの見解

■1. 石上智康著『生きて死ぬ力』（増補版2020年中央公論社）

●愚身（み）

●悟りにいたる うえで 大切なことは 無常を觀
じる ということ（65頁）

●こと もの すべて 縁起 空である と悟り

安樂に 成る（90頁）



精いっぱい生きて

死ぬときは「そのまままでい

石上智康著『生きて死ぬ力』 現役の84歳

コロナ禍の今こそ伝えたいこ

死ぬ力

■2. 勸学寮「消息 解説」（『本願寺新報』2023.2.1）

「凡夫の立場からすれば異様」

「智慧の眼で眺めた時には「煩惱と菩提は一つ」と見ることが
できます」

↓ 当流は 私が「絶対的な真実無相」（智慧をさとする仏道ではありません）

↓ 当流は 仏が「智慧からこの私をよんでくださる慈悲」の仏道です

■3. 総長退任挨拶（『宗報』2023.6）

「そのまま」助ける ご法義の肝要

阿弥陀仏のお慈悲が、なぜ撰取不捨であり得るのか。

煩惱具足のこの私が、信心ひとつで、どうして「そのまま」救われるのか。

↓私の煩惱と仏のさとりは 本来ひとつゆえ

真如法性・縁起・空・無相・自然（お覚りの境地・「そのまま」助ける弥陀の本願）

正しくわかりやすく届く救いの言葉（伝わる伝道）

□本来の「法義の肝要 信し聞其名号 仏願の生起本末を聞く

仏願の生起 弥陀が本願を起こされた理由

↓自らの力では決して迷界より出ることのできない私を救うため

本 法蔵因位の際きの発願修行

末 願行が満足して、阿弥陀仏として 十方衆生を済度されつつあること

■4. 「門主」新しい「領解文」を通して伝えたいこと と』（『中外日報』2023.3.17）

●「ご法義自体は不変ですが、その伝え方は
時代や社会の状況に応じた工夫が求められ
ます。」

●私は最後の第3段落を重視しています。

それは、既に「念仏者の生き方」や「私たち
のちかいかい」でお示しした思いと同様で
す。



御文章集成 第40通 (『聖典全書』5巻275頁。『真聖全』帖外第21通。原漢文。書き下しました。)

定 於眞宗行者中可停止子細事

- 一、諸神并びに佛・菩薩等を軽しむべからざるの事。
- 一、諸法・諸宗全く誹勝すべからざるの事。
- 一、我が宗の振舞を以て他宗に對して難ずべからざるの事。
- 一、物忌の事佛法の方に就て之無しと雖も、他宗并に公方に對して堅く忌むべきの事。
- 一、本宗に於いて相承无きの名言を以て恣いままに佛法讚嘆し、かたがた旁 然るべからざるの事。
- 一、念佛者に於いて国に守護・地頭に專にすべし、軽んずべからざるの事
- 一、無智の身を以て他宗に對して雅意(我が意)に任せて、我が宗の法儀を其の憚はばかり無く讚嘆せしむる、然るべからざるの事

一、自身に於いて未だ安心決定せず、人の詞を聞きて信心法門讚嘆し、然るべからざるの事

一、念佛会合の時、魚鳥を食すべからざるの事

一、念佛集會の日、酒において本性を失い吞むべからざるの事

一、念佛者の中において姿(恣いまま)に博突するを停止すべき事

右此の十一ヶ條此の制法の儀に背くに於いては、堅く衆中に退出すべきもの也。仍し制法の状件の如し。

文明五年十一月 日

■おきてをしめす帖内御文章

1-9' 1-14' 2-1' 2-2' 2-3' 2-6' 2-10' 2-13' 3-10' 3-11' 3-13' 4-1' 4-6' 4-7' 4-8

(4-6) 『註釈版』1173頁)

くせ法門を沙汰して法義をみだす條、もてのほかの次第なり。所詮かくのごときのやからにをひては、あひかまへてこの一七ヶ日報恩講のうちにおいて、そのあやまりをひるがへして正義にもとづくべきものなり。

(4-7) 信心をえたとほりをば、いくたびもいくたびも人にたづねて他力の安心をば治定すべし。

一往聽聞してはかならずあやまりあるべきなり。

(4-8) 一 信心決定のひとも、細々に同行に會合のときは、あひたがひに信心の沙汰あらば、これすなはち眞宗繁昌の根元なり。

■少年連盟「せいびん」

ち かい

一、仏の子は すなおにみ教えをききます

◇ち かい (9ページ)

一、仏の子は かならず約束をまもります

一九五五(昭和三十)年に婦人青少年部において六波羅蜜をもとに考案されたものです。こ

一、仏の子は いつも本当のことをいいます

れは、如来の眞実清淨ないのちのあり方を押し

一、仏の子は にこにこ仕事をいたします

て、わが身を知らされるものです。

一、仏の子は やさしい心を忘れません

■「本願寺新報」2012.1.1 親鸞聖人750回大遠忌 御正当をお迎えします 梯實圓和上

す。その意味でこの事故は経済的利潤の追求を、すべてに優先させている思潮への激しい警鐘と受け取るべきでしょう。自分と自分の属する集



まことの安穩を目指して

勸学 梯 實圓

団の利潤を最優先にすることは、人間の持つて生まれた性分ですが、決して野放しにしたり、扇動すべきものではありません。自分の欲望を満足させてくれるものを価値あるものとして愛着し、是が非でも取り込もうとすることを貪欲と呼んで、心ある人は厳しく戒めてきました。貪欲は、必ず自分に都合の悪いものを有害と決めつけて排除しようとし、憎悪を燃やしていきます。それを瞋恚と呼んでいます。貪欲のあるところには必ず瞋恚が生まれ、愛欲と憎悪に溺れ、焼かれる苦惱の人生に迷い込みます。

います。そしてこのような毒気の強い心のはたらきを「三毒の煩惱」と呼び、そこから自他のあらゆる苦惱が起こるといいます。それを浄化することによって自他共にまことの安穩（涅槃）に至ると教えられたのが仏陀の教えだったのです。

建長4年（1252）、80歳の聖人は、浄土のさとりを目指して生きる念仏者の日常生活を、お手紙（御消息）を通して、次のように厳しく諭されています。

ところで、こうした愛憎の想念の根元には、自分にとらわれ「自分の都合」を第一と考える自己中心的な想念が絶え間なく起こって、貪欲と瞋恚を増幅しています。その想念を仏陀は愚痴（無知）とも、無明とも呼ばれて

「もとは無明の酒に酔ひて、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒をのみ好みめしあうて候ひつるに、仏のちかひをききはじめしより、無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこしづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましあうて候ふぞかし」『註釈版聖典』7

（39ページ）

阿弥陀如来の誓願に喚び醒まされて念仏する身に育てられているものも、元は酒に酔っぱらうて正体を失い、毒を毒とも思わずに食らうて「いのち」を削るような愚かな生き方をしてきました。しかし、仏の御名（南無阿弥陀仏）を称え、如来の大悲のみ言葉に喚び醒まされて生きようになつた今は、少しずつではあるが、酔いが覚め始めるように、過ちを過ちと知らされ、自他を損なう三毒の煩惱も少しずつではあるが、慎み、み教えを聞くことを楽しむようになってきておられるはずであるといひます。

自分を愚かな煩惱具足の凡夫と思ひ知らされた念仏者は、この御正当を機縁に、いよいよ煩惱の醜さ、怖ろしさを思い知り、力の及ぶ限り我欲に歯止めをかけるよう、阿弥陀如来、聖人に慚愧をこめて誓わせていだこうではありませんか。（行信教校名誉校長）

以上 何かご指摘がありましたらご連絡ください。

〒599-8125 大阪府堺市東区西野521番地 旭照寺 senjakuhongan@gmail.com 山上正尊